

佐賀県が進める大規模太陽光発電所（メガソーラー）の誘致計画に対し、候補地変更を求める声が上がっている。弥生時代の集落跡として知られる吉野ヶ里遺跡と隣接し、景観の調和を崩す懸念があるためだ。県は7月までに事業者を選定する方針だが、反対派の説得は難航しそうだ。

県は吉野ヶ里歴史公園（神崎市、吉野ヶ里町）の北西に広がる神崎市の

吉野ヶ里 隣接地にメガソーラー

「景観台無し」と反対の声

造成地にメガソーラーをほつみつとさせる景観が計画。出力は一般家庭2台無しだ」と批判する。400世帯分に当たる8千キロ以上を想定する。景観維持のために、県は2012年度予算で周辺に異議を唱えるの辺の植栽やフェンスの整備は同遺跡に思い入れの強備費などに約1億7千万

強いことも、地元の慎重姿勢の背景にある。神崎市の松本茂幸市長は「市には僅かな固定資産税が入るだけ」と冷やかだ。県は経済効果について「関連産業の進出などで、波及効果がある」（新エネルギー課）と主張。「歴史と最先端技術を学習できる場にした」と提案する。メガソーラーと公園の連携を事業者選定の基準に盛り込むことなどで理解を得たい考えだ。

佐賀県の説得、難航か

い人々だ。歴史研究者ら円を計上。だが、吉野ヶ里町の江頭正則町長は「送電施設が完成すれば景観にはマイナス」と懐疑的だ。雇用などの経済効果が薄いとの見方が根